

うきたむ

第12号

1998.11.3

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津 2117 TEL (0238-52-2585)
FAX (0238-52-4665)



うきたむ縄文まつり（9月6日夜）

体験型博物館への志向

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

館長 川崎利夫

全国風土記の丘協議会の折に、成田市付近にある「千葉県立房総のむら」を見学することができた。そこには広大な敷地に、江戸時代末頃の商家の街並が再現されていた。木戸をくぐって中に入ると、めし屋・そば屋・小間物屋・呉服屋・お茶屋・瀬戸物屋・絵草子屋・鍛冶屋などが約一〇〇メートルにわたって店をつらね、街道筋には半鐘が立ち、祠があり、荷車が往き来する。そしてその頃の服装をした人が店番をし、手桶で水まきをしている。あたかも幕末のころにタイムスリップした感じである。

商家では、物を売っていることはもちろん料理づくり、紙すき・竹細工・下駄づくり、焼きものなど体験することができる。この街並みの裏には、武家屋敷があり茶華道などもできる。広い畑を横切ってしばらく行くと房総の古い農家に行き着く。ここでも各種の体験ができる。

こうして一日江戸時代の生活体験を楽しむことができる。わたしどもの資料館でも、土器づくりや勾玉づくり、編布教室など年間を通しての体験学習に力を注いできた。これがたとえば縄文時代の環境と雰囲気のみでこのころみられたら、もっと楽しく深まっていくにちがいない。このような「縄文の村」の体験型博物館を夢みている。

企画展

第7回

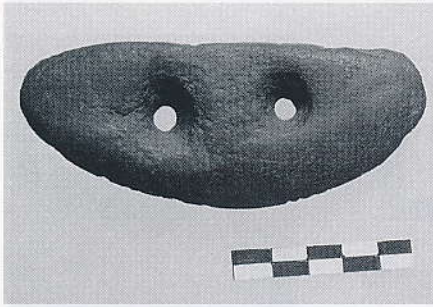
「やまがたの弥生文化」

—水田稲作の始まり—

今日米は日本人の主食であるが、水田稲作が始まったのは弥生時代からである。かつて考えられていたよりもかなり早く山形の地でも水田農業が行われていたことがこのごろわかってきた。その時代にスポーツをあて、残された遺物から当時の生活や文化を考えることをねらいとした。県内では初めての試みである。

縄文から弥生へ

県内ではまだ弥生時代の集落跡を発掘した例はほとんどない。弥生時代の遺物は、片々たるもので、西日本にみられるように



置賜唯一の石包丁（南陽市萩生田出土）

でも土器のなかに、今までとはひと味ちがうものを発見するにちがいない。縄文晩期の後半の東根市蟹沢、米沢市李代、河北町花ノ木などの終末期土器群をはじめに展示した。それが弥生文化の展開とともにどう変化をとげていくのか、感じとられることをねらいとしている。この時期にも、畑稲作や小規

模な畑地を利用した米づくりはあったことにもふれた。

弥生文化の展開

県内でもすでに西日本の弥生前期に水田稲作が開始されたことは、水田の跡は未発見ながら酒田市生石2遺跡の遠賀川系土器や粉跡圧痕土器、炭化米そのものの発見から考えられるところである。

生石2遺跡の遠賀川系土器

在来の土器との折衷様式、東北在来の大洞A式から砂沢式系の土器、山形市筏山や河北町花ノ木などより出土した在来系土器、その中の粉痕を残す土器などを展示した。

土器のなかに縄文晩期以来の様相を色濃く残すことは、彼らの生活が縄文時代とさほど変わらなかつたことを示している。

これまでの多角的、網羅的な食料獲得に、米というメニューが一つ加わっただけであった。西日本のように、階級が発生し、国家が誕生し、戦争が始まるというような激動の変革はなかつたといわなければならない。つまり西日本の弥生文化とはかなり性格を異にした「東北型弥生文化」とでも云いうるものであった。

でも中期後半の山形市千手堂

南河原の甕棺や米沢市清水北Cの壺のなかにみられる渦巻・綾杉・三角文など細い線で描かれた幾何学文様に、これまでとは違ったものを読みとることができ

置賜唯一の南陽市萩生田の石包丁は、水田稲作の展開が一層すすんだ中期後半の所産であろう。

弥生から古墳へ

県内では弥生後期の遺跡も遺物も少ない。展示資料の中の羽黒町高寺、高島町観音岩の土器の中に見出すことができる。

水田稲作が順調に発展するならば、それらの遺跡が平地部で多く発見されていい筈なのに、意外に丘陵地や観音岩の洞窟などから発見されるのは謎の一つである。

遺跡の数が少なく、しかも山地部に立地する例が多いことをもって、気候の一时的寒冷地による稲作の後退、あるいは海退現象の後の温暖化の時期に遺跡が深く埋まってしまったとする説もある。この



展示会場

時期以降に、北海道からの後北式文化が南下してくる。北からの文化刺戟を多く受けた時期である。そして四世紀の古墳文化の時代を迎えるが、弥生後期と古墳時代との間には大きな断絶を誰しも感じるに違いない。展示のなかでは、山形市今塚の大型壺をはじめ高坏・坏などを最後に並べたが、弥生後期の天王山式の線上にこれら古式土師器があるとは思われない。弥生文化の展開の課程は多くの謎にみちている。この企画展をきっかけに、謎をとく鍵を見つけないものである。

考古に学び、考古に遊ぶ

「うきたむ考古の会」が発足して4年目になる。館が主催する体験教室や遺跡めぐりに参加し、いつも顔を合わせる人たちの間から自然に生まれた会である。いま会員42名。「考古に学び、考古に遊ぶ」をモットーとしている。

「うきたむ考古の会」の活動をふりかえって

みる・きく・ふれる遺跡の旅

「考古の会」のもっとも大きな行事は、一泊の遺跡の旅だ。

毎年六月にバス一台での旅行で、楽しみながら遺跡や自然に親しみ、見聞をひろめる。いつも四〇名をこえる参加である。早目に申し込まないと、定員を越えて残念ながらお断りしなければならぬ。

一昨年の一回目は、青森県三内丸遺跡、亀ヶ岡文化のふるさと木造町、秋田県大湯のストーン・サークルなどをまわった。泊りは青森市内。北の縄文文化をさぐる旅であった。

昨年は岩手県平泉、花巻、そして江刺藤原の里をめぐった。古代中世の平泉黄金文化を訪ねるテーマ。泊りは厳美溪温泉であった。

今年は六月二七・二八日に「文明のクロスワード 会津盆地を訪ねる」テーマで、会津の慧日寺・八葉寺・勝常寺などの古寺、また大塚山古墳や亀ヶ森・

鎮守が森古墳などの古墳をまわり、芦の牧温泉に泊って大内宿を歩き、充実した旅を無事終えることができた。

宿では夜の懇親会も楽しい。ここどころ期せずして、「ふるさと」の大合唱がおこる。部屋々々では、深夜まで考古談義に花が咲く。

来年についてはまだ決まっていないが、栃木のしもつけ・なす風土記の丘をめぐる案や、秋田城や弘田柵を見学地にする案もある。

だれでも参加 「うきたむ考古」

この会の会誌「うきたむ考古」も三号まで発刊されている。館で行われる特別講演会の要旨が集録され、岡田康博・佐原眞・小林達雄氏などの講演がこれまで掲載された。論文・遺跡紹介など固いものから、旅行記・随想・短歌・俳句・川柳など実に多彩な内容である。

おそらく考古学の雑誌でこのようにユニークなものはないだろう。

だれでもが筆をとり発表できる気軽さと同時に、今日の考古学界や埋蔵文化財問題にもせまることができるとの気品の高さと水

準をねらっていきたい。

五〇〜六〇頁だての小さな雑誌であるが、なかが濃いので売れ行きも良好である。小さいながら、全国へ大きく発信していききたいものである。「日本考古学協会」の折や県内の各種学会でも普及につとめている。

やさしくわかる 考古学のために

気軽に参加できる遺跡散策や交流を深める芋煮会なども行っている。

年一回の総会をもち、そこでは各種報告がなされるが、事業や予・決算について誰でも意見を述べる事ができるのは当然で、会員一人一人が主役の会である。会則の一条は「この会は、やさしくわかる考古学の普及と創造をめざし、考古学を学ぶ生涯学習の場として相互の交流を深める」ことがねらいである。

ふつうの学会や研究会とは異なり、考古愛好者の学習と仲間づくりと遊びの場である。そして本館事業を実質的に推進するボランティアとしての役割をもち、両輪の輪のようになうものとして、両輪の輪のよう活動が期待されるのである。



亀ヶ森古墳にて

- ・事務局 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- ・役員
- ・会長 川崎利夫
- ・副会長 伊沢良治
- 高橋良一
- ・事務局長 宇佐美みふゆ
- ・年会費 二、〇〇〇円

観音岩洞穴遺跡群

国道一一三号線を東へ白石市の方へ向かう。安久津の集落を

過ぎ、蛭沢湖へ行く交差点を通過して、駄子町から二井宿へ至る。そこから左折して、上山市橋下への道に入る。まもなく左手に奇岩怪石が緑の木々の間にとつこつとしてそそり立つ観音岩である。

街道から左折して、麓まで車



観音岩十三仏洞

で行くことができる。山麓には曹洞宗慶昌寺がある。

そこから登ると、いたるところに岩壁が樹々の間に点在し、評定岩・天狗岩・屏風岩・夫婦岩・塩吹岩などと名づけられた岩窟が散在する。そしてそれらの岩上や岩窟には、幕末から明治初期に地元の戸田半七などによって刻まれた三十三観音や昭和になつて製作された十三仏などが安置されている。ここは古くから地域の人びとによつて霊場とされてきたところである。

ここから縄文や弥生人の遺物が発見されることに最初に注目されたのは西村真次博士で、「置賜盆地の古代文化」に紹介されている。それによつて多くの人々によつて知られるところとなり、数多く

の遺物が採集された。

はじめての学術調査は、一九五七年に山形大学柏倉亮吉教授、早稲田大学直良信夫講師らによる調査団によつて行われた。もつとも多く遺物が出土したのは、「十三仏洞」と「千豊敷洞」（評定岩）である。

縄文時代の早期から弥生時代までの各時期の遺物が出土した。とくに縄文晩期の終末期大洞Aから弥生時代にかけてのものが多く、土器は破片のみであったが、壺・鉢・甕・台付鉢などがあつた。変形工字文による大洞A式から弥生前期の土器群、捺糸文・連弧文など天王山式をふくむ弥生後期の土器片が出土している。

また多くの貝類や骨角などの自然遺物とともに、貝鎌・骨針・金属器による切削痕のある骨器・貝輪などの他に、紡錘車・磨製石斧なども発見された。

その折に出土した遺物の大半は本資料館に収蔵されている。水田稲作を始めた弥生時代の人びとが山中の洞穴を利用したのは、やはり狩猟・採集など縄文時代の生活をそのまま継承してきた東北型弥生文化の特色であろうか。

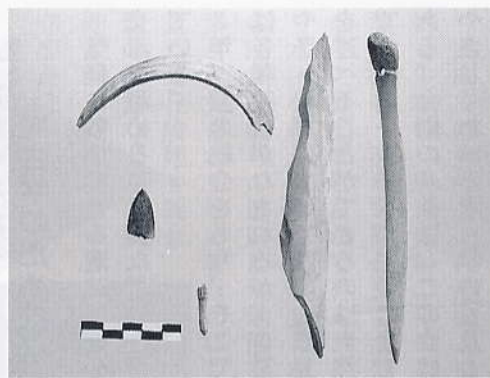
その後調査は行われていない

が、この洞穴や岩陰にはもつと多くの遺物が隠されている筈である。

わが館の展示品(3)

観音岩出土の

骨・貝製品



したものである。

洞窟内出土のため風雨が避けられ、獣骨片や貝類など当時採集された食料残滓も良好な状態で出土した。そのなかにはカワシンジュなどもあつて当時の環境を考える上で貴重である。

珍しいものに貝製の三角形をした鎌や骨片を尖らせた鎌がある。鹿の骨片には鉄製の刃物で切つたり削つたりする痕が明瞭に観察されて、金属器の普及を示す証拠ともなっている。

また上部に小さな孔をあけた骨針、貝殻の縁辺を利用した貝輪などもあり、山中の遺跡からこのようなものが発見されることはきわめて稀である。

蛭沢湖岸の東に位置する神立沢洞穴からは、弥生時代のレピアヘッドが発見されている。すでに織物が存在したことを示している。それにしても水田稲作を生業とする弥生時代の遺跡が山中の洞窟に営まれたのはなぜであろうか。あるいは弥生人の墓として利用され、それらはともにも葬られた遺物であるかどうかこれからの検討にゆだねられている。ここから岩を伝つて蛭沢湖へむかうコースもあるし、縄文草創期の遺物を出した尼子岩陰も近くにある。